

自己奉仕的な評価基準選択

小林知博 (大阪大学大学院人間科学研究科)

「自己奉仕的な評価基準選択」とは、自分が秀でている特性がある分野で成功することと深く関わりがあるという認知であり、その認知は自己評価を高揚させることにつながる。本研究では、自己奉仕的な評価基準選択が、その評価基準と被験者との関連性が強い場合に行われやすいと考え、質問紙調査を行った。135名の被験者(45名の看護学校生、30名の看護婦、62名の短期大学生)を対象に、複数の性格特性についてそれぞれ(1)「よい看護婦として」、(2)「よいOLとして」うまく仕事をしていくために重要だと思う度合い、(3)自分自身にあてはまる度合い、の3種類について尋ねた。その結果、「看護婦」に高い関連性を持つ看護学校生は、看護婦や短大生よりも「よい看護婦」に対する自己奉仕的な評価基準選択を持つことが示された。看護婦および短期大学生には、そのような傾向がみられなかった。この結果を踏まえ、自己奉仕的な評価基準選択が行われやすい状況について議論した。

キーワード：自己奉仕的傾向、評価基準選択、関連性、あいまい性、自尊心

問題

自己評価には自己査定・自己高揚・自己確認・自己改善など複数の動機が関連しているとされている(Baumeister, 1998; Sedikides & Strube, 1997)。そのうち自己高揚動機にかかわる自己評価の傾向については、近年、北米において様々なアプローチからの研究が行われており、それらの多くが、人は自己概念のポジティブな面を高揚させ、ネガティブな情報から自己を防衛するように情報を歪めて認知していることを実証している。Taylor (1989) はポジティブ幻想 (positive illusion) という概念を提唱し、人には一般的に、自分自身の現状や将来を非現実的なまでにポジティブにとらえるという傾向があると指摘した。人はなぜ実際以上に自己をポジティブに認知できるのであろうか。それらの認知的バイアスが人々に保持される原因として考えられるのが「自己奉仕的な因果理論生成 (self-serving generation of causal theories) 」(Kunda, 1987) や「優秀性の自己奉仕的モデル (self-serving models of excellence) 」(Dunning, Leuenberger, & Sherman, 1995) といわれるものである。

Dunning et al. (1995) によれば、人は各々、社会的領域における成功・優秀性・有能性に関する独自のモデル、つまり評価基準を持っており、それらの評価基準は人によって異なっている。例えばリーダーとして成功する特性 (Dunning, Perie, & Story, 1991)、結婚生活がうまくいく特性 (Kunda, 1987)、セラピストとして成功する特性 (Dunning et al., 1995)などを評定するにあたり、人はそれぞれ自分自身にあてはまる特性 (self-descriptive attributes)¹⁾の重要度を高く評定している。またこの傾向は自尊感情²⁾に脅威を感じ、その自尊感情を高めようとする動機づけが高いときに顕著となっている。これらの研究は、人は自己像と「成功する人の像」を類似させるようなバイアスを持っていること、またそのような評価基準は人により異なることを示している。人がそれぞれ独自の評価基準を保持していることが明らかになれば、なぜ他者評価が人により異なるのか (Dunning et al., 1991) や、自分の能力に関して人はなぜ明らかに誇張した考えを持つのか (Weinstein, 1980) などの多くの自己高揚の傾向にかかわる知見に関して、きわめて重要な説明を提供すると考えられる (Dunning et al., 1995)。

ところで日本における近年の研究では、自己高揚に関する知見は明確でない。たとえば自己高揚的バイアスは日本人には見られない、といった指摘や (Heine & Lehman, 1995, 1997, 1999; 高田, 1987)、親友関係や夫婦関係など他者と自分との関係性に関しては、高揚バイアスを表出する (e.g., 遠藤, 1997)、大学生は自分を平均的な他者よりもよい特性を持っていると評定する (伊藤, 1999) といった指摘などがある。これらの先行研究は多くの場合、質問紙を用いて自己評価や他者評価が直接測定されている。日本人が自己高揚性を表出しにくいのは、他者からの評価懸念が強く働くとする指摘 (古城, 1980; 鹿内, 1983) があることから、日本人にはもともとバイアス自体が存在しないのか、それとも存在はするが単に表出される段階になってバイアスが抑制されるものなのか、という点を検討することは有意義であると思われる。そのため本研究では、表面に出された自己・他者評価だけでなく、より内面的であると考えられる評価的基準の歪みを検討するため、「自己奉仕的評価基準」を人々が持っているのかという点に焦点をあてて検証した。

また、このような自己高揚的な評価基準を持つには、被験者にとって、その活動や課題と自己定義の「関連性 (relevance)」が高いことが重要となってくる (Tesser, 1988)。そこで本研究では、「関連性」の高い状況、低い状況それぞれについて検証するため、看護学校に通う学生および看護婦 (「よい看護婦」への関連性が高い)、そして短大生 (「よいOL」として関連性が高い) を被験者として用い、比較を行った。

なお、Kunda (1987) や Dunning, et al. (1995) で用いられた特性語は、性格特性ではなく、被験者自身にあてはまるかどうか比較的確な、経験の有無に関するものであった。たとえば、結婚した経験があるか、末子であったか、母親が専業主婦であったか、などである。本研究ではこれらの先行研究に従い、被験者がある経験を持つかどうかについても、ある特性にあてはまるかどうかということに加えて尋ねた。また先行研究では、自尊心の高い者は自己高揚的傾向が強いことから (e.g., Crocker, Thomson, McGraw & Ingerman, 1987)、自尊心の効果についても検討した。

仮説

1. 被験者は、自分が重要だと考えている側面 (看護学生および看護婦は看護婦、短大生はOL) において、自己高揚的傾向を表出する。

つまり看護学生は自分に関連性が高い「看護婦」の特性についての評定をするにあたり自己奉仕的になり (自己にあてはまるような特性をより重要視する)、関連性が低い「OL」についての評定には自己奉仕的にならないであろう。他方、短大生は卒業後に看護婦になるよりは、一般企業に就職する可能性がかなり高いと思われる。そのため、より関連性が高い「OL」の特性についての評定をするにあたり自己奉仕的になり、より関連性が低い「看護婦」の評定においては自己奉仕的にならないであろう。

2. この自己奉仕的傾向は、自尊心が高い者ほど強いであろう。つまり自分にあてはまるかどうかという要因と自尊心との交互作用効果がみられるであろう。

予備調査

大阪府内の看護専門学校生 52 名 (男性 4 名、女性 48 名、年齢 $M=26.8$, $SD=6.86$) に、授業時間を利用して調査を行った。質問紙は「よい看護婦 (士) とはどのような特性や経験を持っているか」という自由記述形式で、110 種類の特性単語が得られた。特性単語は最大で 21 人から記述があったもの (例: 「知識が豊富」) から、1 人からしか記述がなかったもの (例: 「頼れる人」、「私生活が充実してい

る」)までであった。そのうち4名以上からの記述があった特性語17個を本調査で用いた。これは予備調査で収集した全特性単語の15.5%を占める。具体的な項目をTable1に示す。なお、本調査の質問紙には、Kunda (1987), Dunning, *et al* (1995)にならい、特性項目だけでなく経験項目も検討するために、これらの研究で用いられていた項目のうち、看護婦に用いても不自然でないと考えられる項目3つ(「長子である」、「結婚している」、「子供を育てた経験がある」)、また予備調査で得られた「様々な仕事をした経験がある」、「患者として入院した経験がある」、「看護婦として働いた経験が長い」の3項目、合計6項目を追加した。

Table 1. 調査に用いた全特性・経験リスト

1	てきばきしている	13	話好き
2	器用である	14	決断力がある
3	時間に厳しい	15	看護学校での成績がよい
4	幅広い知識がある	16	思いやりがある
5	協調性がある	17	上の立場の人の間違いを指摘できる
6	責任感が強い	18	入院した経験がある
7	健康である	19	長子である
8	冷静である	20	様々な仕事経験がある
9	向上心がある	21	結婚している
10	明るい	22	子供を育てた経験がある
11	行動力がある	23	看護婦として働いた経験が長い
12	色々な視点から物事を見ることができる		

方法

被験者 大阪府内の看護専門学校生45名、府内の病院に勤める看護婦30名、府内の短期大学秘書科に通う学生62名。うち男性は2名だけであったため、その2名を除いた合計135名について分析を行った(年齢M=22.7、SD=7.2)。各被験者集団の平均年齢は、看護学生M=19.9(SD=3.3)、看護婦M=33.3(SD=8.5)、短期大学生M=19.4(SD=0.5)、であった。看護専門学校生と短大生については授業時間を利用して一斉に質問紙を配布した。看護婦は婦長に代表して質問紙を預け、仕事の合間での回答を依頼した。

質問紙 質問紙は「職業意識についての調査」と題し、予備調査で収集した特性と経験の合計23項目を、(1)「よい看護婦(士)として」、(2)「よいOLとして」うまく仕事をしていくために重要だと思う度合い、(3)自分自身にあてはまる度合い、の3種類について尋ねた。(1)「よい看護婦(士)として」、および(2)「よいOLとして」うまく仕事をしていくために重要だと思う度合いの判定については「全く重要でない」から「非常に重要」までの9段階評定で、(3)自分自身にあてはまる度合いに関しては、「あてはまらない」から「あてはまる」までの7段階評定で尋ねるものであった。ただし(3)のうち6つの経験項目には経験が「ある」か「ない」かの2種類しかないため、2件法をとった。これはKunda (1987), Dunning, *et al.* (1995) にならった。また個人差を測定するためにRosenberg (1965; 山本・松井・山成, 1982) の自尊心尺度を用い、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の5段階評定で回答を求めた。

結果

操作チェック 看護学生および看護婦が、短大生と比べて「看護婦」という職業に高い関連性を感じているか、また短大生が看護学生や看護婦に比べて「OL」という職業に高い関連性を感じているかどうかを確認するため、2種類の操作チェック項目「 としてうまくやっていくことは、自分にと

って重要だ」、「自分は としてうまくやっていると」を、「看護婦として」、「OLとして」それぞれについて7段階評定で尋ねた。4項目への評定値を従属変数、被験者集団(看護学生、看護婦、短大生)を独立変数とした1要因分散分析を行ったところ、すべての項目において被験者集団間に有意な差があった(看護婦重要: $F(1, 131) = 157.10, p < .001$)、看護婦としてうまくやっていると($F(1, 131) = 40.97, p < .001$)、OL重要($F(1, 131) = 75.32, p < .001$)、OLとしてうまくやっていると($F(1, 131) = 22.98, p < .001$)。Tukey法による下位検定の結果、看護婦項目2つについては、看護学生と看護婦が、短大生よりも有意に高い評定を行っていた(看護婦重要: 看護学生 6.19 看護婦 5.77、短大生 2.18、看護婦としてうまくやっていると: 看護学生 4.60 看護婦 4.70 短大生 2.77)。OL項目2つについては、短大生が、看護学生と看護婦よりも有意に高い評定を行っていた(OL重要: 看護学生 2.23、看護婦 2.41、短大生 5.54。OLとしてうまくやっていると: 看護学生 3.26、看護婦 3.07、短大生 4.98)。

操作チェックの結果から、看護学生と看護婦は、短大生よりも「看護婦」という職業に強い関連性をもっており、また短大生は、看護学生・看護婦よりも「OL」という職業に強い関連性をもっていることが明らかになった。また看護学生と看護婦の評定値の間には統計的に有意な差はなかった。

特性のあてはまり高・低群の分割 まず「自分にあてはまるかどうか」で被験者を2分するため、17種の特性項目ごとに質問紙の③「自分自身に当てはまる度合い」の平均値をもって被験者を2分した。以後、あてはまり高群・低群とよぶ。特性が自分にあてはまる度合いによって被験者を高・低の2群に分割したのは、経験6項目については経験の有無によって被験者を2分することになるため、特性項目と経験項目を比較するにあたり全体を統一する必要があったからである。これはKunda (1987)、Dunning, *et al.* (1995)の方法にならった。また6つの経験項目については、経験の有無比率に極端な差があったものをのぞき、最終的に「入院経験」、「長子」、「様々な仕事経験」の3項目を分析に用いた。合計20項目それぞれについて自己奉仕的な評価基準選択について検討するためには、各々の特性について、あてはまり度(高・低)を独立変数とした、それぞれの特性への重要度評定値を比較する必要がある。そのため、分析は、特性や経験の項目ごとに行った。なお、自尊心の高・低群は10項目の平均値3.17を境に、高群・低群に分割した。

従属変数の検討 自分が重要だと考えている側面(看護学生および看護婦は看護婦、短大生はOL)において、自己奉仕的傾向を表出する」という仮説1を検討するため、20項目それぞれについて①「よい看護婦として」、そして②「よいOLとして」うまく仕事をしていくために重要だと思う度合いを従属変数とし、特性あてはまり度(2:高・低)を独立変数とする、対応のないt検定を行った。看護学生の結果をTable 2に、看護婦の結果をTable 3に、短大生の結果をTable 4に、それぞれ有意差および傾向差のみられたもののみ示す。

1. 看護学生の評定 Table 2に示したように、看護学生は、17個の特性中5つにおいて有意に、1つにおいて傾向的に($p < .10$)、3つにおいて15%水準で、その他7つにおいて有意ではないが方向的に、自分にあてはまる特性があてはまらない特性よりも重要だと評定していた。逆の方向の有意差がみられた項目は皆無であり、有意ではないが方向的に逆の数値の評定がなされていたのは1項目のみであった。3個の経験特性では、仮説通りの有意差・傾向差があったものは無く、15%水準での差1、有意ではないが方向性がみられるもの2、という結果であった。

Table 2. 看護学生：特性の保持・不保持による，重要度評定

特性単語	看護婦として働くために重要				OLとして働くために重要			
	あてはまり		T	p	あてはまり		T	p
	低群	高群			低群	高群		
てきぱきしている	7.32	7.90	1.57	0.15	6.55	6.95	1.06	n.s.
時間に厳しい	7.74	8.67	3.58	0.01	7.78	8.28	1.53	0.15
責任感が強い	7.69	8.37	1.99	0.10	6.76	7.29	1.20	n.s.
向上心がある	6.96	8.00	3.24	0.01	6.71	7.00	0.74	n.s.
色々な視点から物事を見る ことができる	7.48	8.10	1.68	0.15	6.55	6.90	0.67	n.s.
話好き	5.81	6.55	1.62	0.15	5.19	5.14	0.11	n.s.
健康である	7.24	8.23	2.23	0.05	6.41	7.23	1.75	0.10
冷静である	7.04	7.53	1.38	n.s.	6.33	5.74	1.68	0.15
看護学校での成績がよい	4.90	5.29	0.82	n.s.	5.09	4.19	1.46	n.s.
思いやりがある	7.70	8.50	2.11	0.05	5.88	5.20	0.67	n.s.
上の立場の人の間違いを指 摘できる	6.33	7.31	2.72	0.05	5.93	6.56	1.26	n.s.
入院した経験がある	4.85	5.76	1.57	0.15	1.96	1.82	0.31	n.s.
様々な仕事経験がある	6.00	6.07	0.06	n.s.	4.50	6.59	1.86	0.10

他方、「よいOL」への評定の中で、自分にあてはまる特性をあてはまらない特性より有意に重要だと評定されたものは無く、1つにおいて傾向的に ($p < .10$)、2つにおいて15%水準で、その他7つにおいて有意ではないが方向的に、自分にあてはまる特性があてはまらない特性よりも重要だと評定されていた。この結果は「よい看護婦」への評定とは大きく異なる。逆の評定、すなわち自分にあてはまらない特性がより重要視されていたものは合計5項目あった。そのうち有意差はなく、1項目において傾向差、4項目においてはその方向性がみられた。3個の経験特性では、仮説通りの有意差があったものは0、傾向差1、有意ではないが方向性がみられるもの1、逆の方向性がみられるものが1、という結果である。以上をまとめると、看護学生は、「よい看護婦」への評定では「よいOL」への評定よりも多く、あてはまり度による有意差を持っており、将来の職業としてより関連性を強く感じている看護婦に関してOLよりも強く、「自己奉仕的な評価基準」を持っていることが示唆された。

仮説2「この傾向は、自尊心が高い者ほど強いであろう。つまり保持・不保持と自尊心の交互作用効果がみられるであろう」を検証するために、「よい看護婦」・「よいOL」への評定それぞれを従属変数とした、自尊心(2:高・低)×特性保持(2:保持・不保持)の2要因分散分析を行った。有意な交互作用効果は、「よい看護婦」への評定のうち1項目「冷静である」のみでみられたが ($F(1, 39) = 4.92$, $p < .05$)、その方向性は、仮説2とは逆であった。つまり、自尊心が高い被験者は、自分にあてはまらない特性をあてはまる特性よりも重要視し、自尊心が低い被験者は、自分にあてはまる特性をより重要視していた。よって看護学生に関しては、仮説2は支持されなかった。

2. 看護婦の評定 Table3に示したように、「よい看護婦」への評定の中で、自分に当てはまる特性についてあてはまらない特性よりも重要だとする評定に有意差・傾向差があったものは17項目中3項目 ($p < .01$ および $p < .05$)と1項目 ($p < .10$)の計4項目あった。ほか15%水準での差が2項目、統計量は不十分であったが方向的には同じ項目は8つあった。逆の方向の有意差があったものは1項目、統計量は不十分だが方向的に逆であるものは3項目あった。経験については、仮説通りの有意差があったもの1項目、方向的に同じものが2項目であった。

「よいOL」への評定の中で、自分にあてはまる特性があてはまらない特性より有意に重要だと評

定されたものは17項目中2項目、傾向差4項目、ほか有意ではないが同方向の傾向が見られたものは8項目だった。有意ではないが逆方向の傾向が見られるものは3項目だった。経験3項目については、仮説通りの有意差があったものはなく、すべて統計量は不十分であったが方向的に仮説と同じであった。

Table 3. 看護婦：特性の保持・不保持による，重要度評定

特性単語	看護婦として働くために重要				OLとして働くために重要			
	あてはまり		T	p	あてはまり		T	p
	低群	高群			低	高		
時間に厳しい	7.18	8.08	2.67	0.05	7.24	8.00	1.91	0.10
責任感が強い	7.88	7.92	0.12	n.s.	7.22	8.00	1.98	0.10
行動力がある	6.32	6.88	1.53	0.15	6.68	6.88	0.49	n.s.
色々な視点から物事を見る ことができる	7.27	8.13	2.27	0.05	6.80	7.60	1.67	0.15
話好き	5.26	5.43	0.33	n.s.	5.22	6.14	2.28	0.05
決断力がある	6.86	6.22	2.31	0.05	6.76	6.25	1.14	n.s.
冷静である	6.30	7.10	2.07	0.05	5.50	7.00	3.49	0.01
思いやりがある	7.57	8.29	1.64	0.15	6.35	6.71	0.87	n.s.
上の立場の人の間違いを指 摘できる	5.79	6.36	1.81	0.10	5.68	6.45	1.94	0.10
長子である	2.63	3.86	2.20	0.05	3.44	3.64	0.36	n.s.

仮説2の、あてはまり度と自尊心の交互作用効果について検証するために、「よい看護婦」・「よいOL」への評定それぞれを従属変数とした、自尊心(2:高・低)×特性保持(2:保持・不保持)の2要因分散分析を行った。「よい看護婦」への評定において有意な交互作用効果があったのは「色々な視点から物事を見ることができる」(F(1,26)=5.50, p<.05)であり、仮説と同じ方向であった。「よいOL」への評定においては有意な交互作用効果はみられなかったが、「明るい」(F(1,26)=3.01, p<.10)、「行動力がある」(F(1,26)=3.28, p<.10)において傾向差が、「色々な視点から物事を見ることができる」において15%水準での差がみられ(F(1,26)=2.54, p<.15)、すべて仮説2と同じ方向性を示すものであった。つまり、全般的にみると自尊心が高い被験者の方が、自分にあてはまる特性を「よいOLとして」より重要だと判断しており、自尊心が低い被験者は自分にあてはまらない特性を「よいOLとして」より重要だと判断していた。有意差および傾向差が3項目についてしか見られていないことから明言はできないが、それらがすべて仮説2と同じ方向だということから、特性によっては、自尊心が高いほど自分の持つ特性を重視するという傾向があるようである。

3. 短大生の評定 Table 4に示したように、「よい看護婦」に関する評定において、自分に当てはまる特性についてあてはまらない特性よりも重要だとする評定に有意差があったものは17項目中5つ(p<.01およびp<.05)、傾向差はなく、15%水準での差が2つ確認された。残り10項目はすべて統計的には有意でないが同方向の傾向が見られ、逆の方向の有意差・傾向差がみられたものはなかった。経験有無の項目に関しては、有意ではないが仮説通りの方向性がみられたものが3つあった。

「よいOL」についての評定は、自分に当てはまる特性についてあてはまらない特性よりも重要だとする評定に有意差・傾向差があったものは17項目中3つ(p<.05)、傾向差1つ、15%水準での差があるものが3つあった。残り10個の項目はすべて統計的には有意でないが同方向の傾向が見られた。逆の方向の有意差・傾向差は見られなかった。経験の有無による重要度評定は、「よい看護婦」

評定では、統計的に有意ではないが仮説通りの方向性があるもの2つ、「よいOL」評定では、仮説通りの傾向差1つ、統計的に有意ではないが仮説通りの方向性があるもの2つであった。看護学生や看護婦の評定とは異なり、短大生は「よい看護婦」よりも「よいOL」への評定において強く、あてはまり高群が低群よりも評定値が高くなると予測したが、そのような傾向は見られなかった。よって短大生においては仮説1は支持されなかった。

仮説2の、特性の自己あてはまり度と自尊心との交互作用効果について分析したところ、「よい看護婦」評定では「看護学校での成績がよい」1項目 ($F(1,57)=2.95, p<.10$) において傾向差がみられたが、「よいOL」評定では「いろいろな視点から物事を見ることができる」($F(1, 57) = 4.45, p<.05$)、「話好き」($F(1,57)=6.91, p<.05$) において有意差が、「器用である」($F(1,57)=3.81, p<.10$)、「行動力がある」($F(1, 57) = 2.98, p<.10$)、において傾向差が、「決断力がある」($F(1,57)=2.17, p<.15$) において、15%水準での差がみられた。ただしすべて仮説2とは逆の方向であった。つまり、自尊心が低い被験者の方が、自分にあてはまる特性を「よい看護婦として」また「よいOLとして」より重要だと判断しており、自尊心が高い被験者は自分にあてはまらない特性をより重要だと判断していた。

Table 4. 短大学生：特性の保持・不保持による、重要度評定

特性単語	看護婦として働くために重要				OLとして働くために重要			
	あてはまり		T	p	あてはまり		T	p
	低群	高群			低群	高群		
てきぱきしている	7.76	8.18	1.51	0.15	7.41	7.84	1.25	n.s.
器用である	6.91	7.47	1.65	0.15	6.30	7.16	2.25	0.05
幅広い知識がある	7.66	7.76	0.33	n.s.	7.34	7.86	1.53	0.15
行動力がある	7.23	8.04	2.98	0.01	7.74	8.31	2.28	0.05
向上心がある	6.98	7.94	2.44	0.05	7.63	8.06	1.26	n.s.
色々な視点から物事を見ることができる	6.78	7.49	2.20	0.05	7.72	8.16	1.45	n.s.
話好き	6.03	6.90	2.48	0.05	6.22	6.52	0.74	n.s.
決断力がある	6.85	7.24	1.04	n.s.	6.85	7.50	1.65	0.15
看護学校での成績がよい	4.50	5.15	1.09	n.s.	4.09	5.21	1.84	0.10
思いやりがある	7.94	8.12	0.58	n.s.	7.19	7.76	1.46	0.15
上の立場の人の間違いを指摘できる	6.14	7.12	3.29	0.01	6.04	7.03	2.38	0.05
母親が仕事をしていた	4.91	5.42	1.23	n.s.	4.50	6.59	1.82	0.10

以上の結果を総合的に判断して、関連性の高い分野と低い分野との比較において、自分にあてはまる特性をより重要な特性だと認知する傾向が看護学生については高いと言え、仮説1は看護学生についてのみその傾向が支持されたといえる。自尊心に関しては仮説通りの方向へ一貫した有意な交互作用効果がみられなかった。明確な結果が得られなかったことから仮説2は支持されなかったと考えられる。

考察

本研究では、予想されたような「優秀性の自己奉仕のモデル（自己奉仕的な評価基準選択）」について、全面的に明確な支持が得られたとは言えないが、特に看護学生においてその存在が示唆された。つまり、看護学生は、自分に関連性の高い「看護婦」としてうまくやっていく特性について、

自分にあてはまる特性を、あてはまらない特性よりもより重要であると約半数の特性について評定していた。その一方で、関連性が低い「OL」でうまくやっていく特性については、そのような傾向はみられなかった。この傾向はKunda (1987), Dunning, et al. (1995) と一致する結果であり、日本人を被験者としても同様の傾向がみられたことは意義深いと考えられる。既に看護婦として働いている被験者は、看護学生と比較して、バイアスの少ない、よりバランスのとれた評定を行っていた。つまり、「よい看護婦」に関する評定では、看護学生と比べて自己奉仕的な有意差のある特性数が減少し、「よいOL」に関する評定では、有意差のある特性数が増加している。

この点に関しては、以下の様に考察できる。看護学生にとって看護婦は、将来の目標であり、看護婦としてうまくやっていきたいという動機づけ、そして将来のことという意味であいまい性が高い。動機づけに関し、Kunda (1987) は学部生を対象に「幸せな結婚」についてや、大学院進学希望者を対象に「大学院での成功」について、さまざまな特性の重要性を判断させ、動機づけが高い場合は、より自己奉仕的な因果理論が生成 (self-serving generation of causal theories) されることを見いだした。これから看護婦として仕事をしていこうと希望している学生にとって、看護婦として成功することへの動機づけが高いことはいうまでもない。そのため、より自己奉仕的な評定が行われたのだと考えることができる。

また、あいまい性に関する同様のことがいえる。Dunning, Meyerowitz, & Holzberg (1989) は、評価基準があいまいである方が、自己のポジティブ視は起こりやすいことを示した。すなわち、あいまいである方が、自分に都合のよいように情報を歪めることができるということである。日本人を対象にした研究では伊藤 (1999) や小林 (投稿中) などがあり、あいまい性が高くなると自己にとってポジティブな判断が行われやすいとされている。本研究の看護学生がより自己奉仕的な因果理論の生成を行ったことは、これらの動機づけとあいまい性の要因が複合して起こったと考えられる。看護婦として働く者にとって、看護婦という職業は既に現実のものであり、うまくやっていくことへの動機づけは高いと考えられるが、あいまい性は非常に低い。具体的に様々な人やケースを知っている場合には、あいまい性が低く、自己奉仕的な因果理論は生成されにくいと考えられる。

その他、以下の解釈も可能である。看護婦を職業としている人は既にその仕事を経験し、現実にもうまくなしているのであるから、ある程度仕事に対する自己効力感を持っているであろう。他方、看護学生にはそのような自己効力感はなく、うまくやっていけるかどうかという不安が強い。自己奉仕的なバイアスを持つことによって自己評価を維持していこうとしている可能性がある。動機づけが強く自己効力感が低い場合に、自己奉仕的な評価基準選択が行われるのかどうかは、今後検討すべき課題である。

短大生に関しては、看護婦よりも有意差が得られた数が多いが、この場合も「よい看護婦」と「よいOL」への評定の間に注目できるほどの差はみられなかった。その理由としては、いくつかのものが考えられる。まず第1に、「看護婦」という職種が非常に明確であるのに対し、「OL」という職種は実際、多岐にわたるものであり、また短大生にとってイメージしにくかった可能性がある。操作チェックより、短大生にとって、看護婦よりもOLとしての将来に動機づけが高いことは明らかであるが、こういった職種、仕事内容であるのかというイメージが描きにくいものであれば、それに関連する性格特性の判断もぼやけてしまうのは自然である。第2に、看護学校生に比べて、短大生はまだあらゆる進路選択が可能であり、今後看護に関する職種を選択する可能性もありうるということである。これらの問題を明確にするためには、今後、弁護士などある特定の職種や資格をめざす専門学校生などを被験者にした調査が不可欠である。

自尊心と特性のあてはまり度合いとの間に交互作用効果があると予測したが、そのような傾向はみられなかった。先行研究では、自尊心の高い者は自己高揚的傾向が強いとされているが、自己奉仕の評価基準を検討した本研究ではそのような効果がみられなかった。特に短大生では、「よい看護婦」、「よいOL」への評定の両方において、低自尊心者が自分にあてはまる特性をより重要視するという、仮説とは逆の結果が得られた。この結果に関しては以下のように考えられる。通常、自尊心が高い人は一般的に自己をポジティブであるととらえる傾向があるが (e.g., Baumeister, Tice, & Hutton, 1989)、この傾向には動機づけが大きな役割を果たす (Brown, 1986)。つまり高自尊心者は、自尊感情に脅威が与えられたり、自分がかくありたいと強く願う目標に関連するものには自己奉仕的となるが、そうでないものには、自己奉仕的评价の度合いに自尊心の差は表れにくい可能性がある。上述のように、看護学生や看護婦に比べ、短大生はまだ将来の職業に関して明確な目標がないと考えられ、従って看護婦やOLのいずれの対象への動機づけも小さかったと考えることができる。短大生は、OLとしてうまくやっていくというよりは、Kunda(1987)が行ったような「幸せな結婚」という対象の方が、動機づけが高まったかもしれない。また、Kunda(1987)やDunning, *et al.* (1995)の研究では自尊心が測定されておらず、自己奉仕的な評価基準は自尊心に関係なく行われるものなのかという点については、今後の検討が必要である。

本研究の結果、「看護婦」という職業への動機づけが高い看護学生は「成功する看護婦像」評定において自己奉仕的な評価的基準を持っているということが示された。つまりその自己奉仕性は、自己に関連性の高い文脈において表出されたと言える。特に日本人において表出の段階では明確になりにくいとされる自己高揚的なバイアスが、評価的基準の段階ではその傾向が見られたことは興味深い結果だといえる。バイアスの表出は状況や文脈に大きく依存する可能性が考えられ、今後異なる状況や文脈において調査を行い、さらに検討を加える必要がある。

引用文献

- Baumeister, R. F. (1998) The Self. In D. T. Gilbert, S. T. Fiske, & G. Lindzey (Eds.), *The handbook of social psychology*: Vol. 1 (4th ed., pp. 680-740). New York: McGraw-Hill.
- Baumeister, R. F., Tice, D. M., & Hutton, D. G. (1989). Self-presentational motivations and personality differences in self-esteem. *Journal of Personality*, 57, 547-579.
- Brown, J. D. (1993). Self-esteem and self-evaluation: Feeling is believing. In Suls, J. M. (Ed), *The self in social perspective. Psychological perspectives on the self*: Vol. 4 (pp. 27-58). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Crocker, J., Thompson, L. L., McGraw, K. M., Ingerman, C. (1987) Downward comparison, prejudice, and evaluations of others: Effects of self-esteem and threat. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 907-916.
- Dunning D., A. Leuenberger, & D. Sherman (1995) A new look at motivated inference: Are self-serving theories of success a product of motivational forces? *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 58-68.
- Dunning D., J. Meyerowitz, & Holzberg (1989) Ambiguity and self-evaluation: The role of idiosyncratic trait definitions in self-serving assessments of ability. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 1082-1090.
- Dunning, D., Perie, M. & Story, A. L. (1991) Self-serving prototypes of social categories. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 957-968.
- 遠藤由美 (1997) 親密な関係性における高揚と相対的自己卑下 心理学研究, 68, 387- 395.
- Heine, S. J., & Lehman, D. R. (1995) Cultural variation in unrealistic optimism: Does the west feel more invulnerable than the east? *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 595-607.

- Heine, S. J., & Lehman, D. R. (1997) The cultural construction of self-enhancement: An examination of group-serving biases. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 1268-1283.
- Heine, S. J., & Lehman, D. R. (1999) Culture, self-discrepancies, and self-satisfaction. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25, 915-925.
- 伊藤忠弘 (1999) 社会的比較における自己高揚傾向 平均以上効果の検討, 心理学研究, 70, 367-374.
- Karasawa, M. (1988) Effects of cohesiveness and inferiority upon ingroup favoritism. *Japanese Psychological Research*, 30, 49-59.
- 小林知博 投稿中 成功・失敗後の自己・自集団高揚傾向
- 古城和敬 (1980) 成功・失敗の原因帰属に及ぼす public esteem の効果 実験社会心理学研究, 20, 23-34.
- Kunda Z. (1987) Motivated inference: Self-serving generation and evaluation of causal theories. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 636-647.
- Rosenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- Sedikides, C. & Strube, M. J. (1997) Self-evaluation: To thine own self be good, to thine own self be sure, to thine own self be true, and to thine own self be better. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, 12, 209-269. California: Academic Press.
- 鹿内啓子 (1983) 他者の成功・失敗の因果帰属に及ぼす Self-Esteem の影響 実験社会心理学研究, 23, 27-37.
- 高田利武 (1987) 社会的比較による自己評価における自己卑下の傾向 実験社会心理学研究, 24, 27-36.
- Taylor, S. E. (1989) *Positive illusions: Creative self-deception and the healthy mind*. New York: Basic Books.
- Tesser, A. (1988). Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 21, pp. 181-227). New York: Academic Press.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

註

- 1) 邦訳すると「自己記述的(説明的)特性」となるが、日本語として意味が分かりづらいので、本研究では「自己に当てはまる特性」とよぶ。
- 2) 本論文では、外的要因によって変動する一時的な感情を自尊感情とよび、比較的変動の少ない自己に対する評価のことを自尊心とよぶ。

Self-serving selection of evaluative standards

Chihiro KOBAYASHI (Graduate School of Human Sciences, Osaka University)

This study investigates whether the selection of standards, by which one judges the excellence of conduct or achievement, is to some degree self-serving. Clearly, one's self evaluation is enhanced if one regards the attributes on which one excels as attributes that are relatively more important than the attributes on which one does poorly. Moreover, self-serving selection of standards may be greater in domains that are closer to one's focal interests (high relevance). A questionnaire study with 135 participants (45 nursing school students, 30 nurses, and 62 junior college students) investigated the relationship between the existence of self-serving selection of standards and the relevance of the domain to each participant. Participants were asked to what extent they thought trait X was important with regard to doing well as (1) a nurse, (2) an office worker, and (3) to what extent the trait X described about the participant. Results revealed that nursing school students, who have high relevance and motivation to become a nurse, had the strongest tendency to have self-serving selection of standards. Factors that foster the self-serving tendency were discussed.

Key words : self-serving tendency, selection of evaluative standards, relevance, ambiguity,

对人社会心理学研究, 2001 年, 第 1 号, 59-68.
Japanese Journal of Interpersonal and Social Psychology, 2001, No. 1, 59-68.

self-esteem